

実践女子大学山岸文庫蔵明融本『源氏物語』の用字

―仮名字母と本文表記の比較の点から―

齊藤 鉄也

要旨

本稿では、「誰がどの本文を用いて一揃えの『源氏物語』写本を作成したか」という伝写関係に関する文献学の疑問を、写本本文の変体仮名の字母と本文表記の相違に着目して考察する。調査対象として、実践女子大学山岸文庫蔵明融本『源氏物語』を取り上げた。これと関連写本を比較し、その本文の流通や伝写関係の調査結果を報告する。

Kana-Character Variation and Orthography in Myōyū-bon Text of “The Tale of Genji” in the Collections of Jissen Women’s University Yamagishi Bunko

Tetuya Saito

I examine a philological query of textual filiation: “Who utilized which source text to produce this *Genji* manuscript?” from the perspective of differences in kana-character variation and ideography. Through case studies of the Myōyū-bon text of “*The Tale of Genji*,” I report the relationships to other extant texts based on orthographic data analysis.

一 はじめに

本稿では、実践女子大学山岸文庫蔵明融本四十四帖と東海大学桃園文庫蔵明融本九帖の『源氏物語』の本文の用字の調査報告をする。具体的には、仮名字母と本文表記の統計的分類結果を報告する。本文の用字の分析方法には、統計的分類方法の一つである「教師なし分類」を用いた。その結果、仮名字母の調査によって、山岸文庫蔵明融本の一部の巻は、明融筆『源氏物語不審抄出』と同筆の可能性がある群に分類されたこと、本文表記の調査によって、東海大学桃園文庫蔵明融本の一部の巻が陽明文庫蔵後柏原院本『源氏物語』の巻と類似することを明らかにした。以下、東海大学桃園文庫蔵明融本のうち、「花散里」を除く八帖を明融臨模本、それ以外の四十五帖の写本を明融本と呼ぶ。

稿者は、これまで、『源氏物語』写本文本に対して、統計的分類方法を適用することにより、仮名字母の出現傾向を利用した書写者の推定と、本文表記の類似性を利用した本文の流通や伝来の推定が可能であることを示してきた^{〔1〕}。本稿では、この分類方法を明融本と明融臨模本に適用し、これまでに調査した他の『源氏物語』写本と比較した調査結果を報告する。尚、明融臨模本の仮名字母に関しては、前稿^{〔2〕}にて定家筆資料と比較し報告している。本稿では、定家筆資料以外の写本と比較した結果を報告する。

以下、二章では、本研究の目的と位置付けを述べる。三章で調査対象と本文データ、調査方法を述べる。四章で調査結果を考察する。五章はまとめと今後の課題である。

二 本調査の目的と位置付け

本調査の目的は、『源氏物語』写本を対象に、その本文の特徴や他の写本本文との関連性を指摘し、「誰がどの本文を用いて一揃えの『源氏物語』写本を作成したか」という伝写関係に関する文献学の疑問への手がかりを得ることである。本調査では、明融本と明融臨模本に加えて、これまで調査した複数の一揃えの『源氏物語』写本の本文を対象に、その仮名字母や本文表記といった用字の類似性を計量的な分析方法を用いて調査する。

これまで、漢字と仮名の使い分けや、仮名遣い、音便といった本文表記の相違は、調査対象とされることが少なかった。この原因としては、本文の解釈に影響を与えないこと、表記の相違の数が膨大であること、その相違と何らかの外部徴証との関係が不明であること、を挙げることができる。本調査では、これらの課題に対して、統計的分類方法を導入し、取り組むことと試みている。これまでの同様の調査結果^{〔1〕}から明らかになってきたことは、複数の写本文の用字が類似することは稀であることである。そして、その用字が類似した場合、仮名字母であれば書写者が同一である可能性があり、本文表記であれば伝写関係を指摘できる可能性がある、といった、用字が類似する写本に対して何らかの写本間関係を指摘できることである。もちろん、これらの写本間関係の指摘は、書写者が自身の仮名字母の使い方に従って書写した場合や、親本の表記を用いて書写した場合に限られる。何らかの理由により、これらの要件が変更された場合には、その関係を指摘できない。用字が類似することは稀であるため、大量の写本本文を必要とし、それらを対象に調査しなければ、写本間関係を指摘することはできない可能性が高い。稿者は、これまで利用が容易な複数の『源氏物語』写本を対象にその用字を継続的に調査してきた^{〔3〕}ことから、比較対象となり得る写本本文データの蓄積が進んでいる。そこで、本稿では、明融本四十五帖と明融臨模本八帖をこれまで調査した写本と比較し

た結果を報告する。

三 調査対象写本と本文データ、調査方法

調査対象とした『源氏物語』写本は、明融本四十五帖と明融臨模本八帖である。両写本を合わせても「胡蝶」を欠く。これらの写本の書誌情報は既に複数の先行研究^{〔4〕}にて報告されているので、本稿では、本調査に関係のある書誌情報のみ触れる。

三・一 調査対象写本の概略

明融本と明融臨模本のうち、伝称筆者である明融筆とされる写本は、明融臨模本を除き二十六帖存在する。このうち、「須磨」「明石」「玉鬘」「紅梅」は、明融と他の人物の二者によって書写されている。他の写本は明融による全文書写とされている。仮名字母の出現傾向の調査では、これらの『源氏物語』写本に加えて、明融筆の『源氏物語不審抄出』^{〔5〕}を、明融筆資料と同筆の可能性を検討するために選択した。また、本文表記の調査では、これまで調査報告を行なった、室町時代書写の『源氏物語』写本^{〔1〕}^{〔3〕}を比較対象に選択した。

三・二 作成した本文データ

作成した本文データは、紙焼きや影印本または公開されている画像から本行本文を入力し、写本と同一の行数と改行位置を持つ。この本文データでは、誤写の修正文字や挿入された文字といった傍記を調査対象としていない。また、

本行本文のうち一音で読む文字は仮名と見做して採字している。このため、作成した本文データは本文が校訂されず、仮名と漢字の使い分けや仮名遣い、誤写や音便といった表記も統一されずに残っている。

本文の調査対象範囲は、これまでの調査結果に基づき、五千字以上であれば十分であることが明らかになっているので、五千字を目安としている。それより短い本文を持つ巻は全文を調査対象としている。

調査対象とした明融本と明融臨模本の本文データに関して、本稿末の表一にまとめた。表一には、巻序と巻名、仮名文字数、仮名字母数、漢字文字数、漢字種類数、総文字数、本文に占める漢字の割合として漢字率を記載している。加えて、伝称筆者を記している。

三・三 調査方法

本稿では、仮名字母の出現傾向と本文表記の類似性の、二つの視点からの調査を行った。それぞれの類似性の調査では、本文データの仮名字母の出現傾向や本文表記の類似性だけに基づいてグループに分類する「教師なし分類」と呼ばれる方法を用いている。仮名字母の出現傾向と本文表記の調査方法は前稿「Ⅰ」と同様であるため、本稿ではその概略を述べる。

仮名字母の出現傾向の調査では、本文データに出現する同音の変体仮名の字母の出現頻度率を求め、それらの総体を調査対象としている。それを仮名字母の出現傾向と呼ぶ。これまでの調査結果からは、この仮名字母の出現傾向が類似する場合、同一の書写者による可能性がある本文を分類できることが明らかになっている。

本文表記の調査では、本文データから機械的に一定サイズの文字列の断片 (N-gram) を生成し、その頻度を調査対象としている。本文表記が類似する二つの本文の場合、この頻度も類似する。この頻度の類似性を、文献学の知見に

基づいて設計した尺度を用いて分類することにより、親子関係といった転写過程において共通する写本を持つ可能性がある写本間関係を指摘できる。加えて、前稿と同様に本文表記の相違の発生要因の調査を行った。この調査では、本文を文字単位で比較し、その相違を集計する。この比較により、漢字と仮名の相違、送り仮名、音便、仮名遣いといった、本文で変化し易い箇所とその傾向を明らかにできる。

三・三・一 仮名字母の出現傾向に基づく分類

仮名字母の出現傾向の調査は、これまでの調査と同様に、階層的クラスター分析を用いている。階層的クラスター分析では、写本間距離の計算方法はIR距離、群間距離の計算方法は群平均法を用いている。写本間距離の計算式や写本間距離を用いた同筆の可能性を指摘する計量的な方法は前稿¹⁾にて報告しているので、ここでは概略を述べる。

仮名字母の出現傾向から見て同筆の可能性がある写本間関係を指摘するために、同筆と考えられる写本を対象に、それらの、階層的クラスター分析で用いている写本間距離の分布を推定し、その90%の範囲を示す写本間距離の値を同筆の可能性が高い写本間距離の基準値として用いている。これまでの調査から、書写者によって写本間距離の分布の形状が異なることが明らかになっているため、複数の書写者の資料から得られた分布を混合して、「平均的な」書写者による写本間距離の分布と見做して基準値を求めている。この値を用いて、同筆の可能性がある写本群を指摘する。具体的には、同筆の可能性がある写本間距離として、^{1.56}を用い、仮名字母の出現傾向の点から、その出現傾向が同一と見做せる写本間距離として^{0.66}を用いている。

三・三・二 本文表記の比較と詳細

本文表記の類似性の調査は、『源氏物語』写本の巻ごとに、明融本または明融臨模本を、その他の『源氏物語』写本文と比較する。その調査方法は、作成した本文データから処理に適した文字列データを生成する段階と分類処理を実行する段階からなる。この方法も前稿^{〔1〕}にて報告しているので、ここでは概略を述べる。

分類処理に適した文字列データの生成は、次の順序で行う。最初に、作成した本文データの最初の文字より一文字ずつずらしながら最後まで長さN文字の文字列(N-gram)を生成する。本調査では、前稿^{〔1〕}と同様にNは5(以下、五文字の文字列を5-gramと表す)とした。次に、同一の5-gramの頻度を集計し、階層的クラスター分析を用いて分類する。集計した5-gramの頻度を用いて、同一の巻の二つの本文の類似性を比較するために、写本間距離が0から1の範囲で表される、cosine 距離と呼ばれる計算方法を写本間距離として採用している。群構成法は平均距離法を用いている。この分類結果を写本間距離の尺度に基づいて詳細分類し考察する。

写本間距離を分類する尺度は「臨模されている」「字配が一致する」「伝来の過程で共通の本文を持つ」「同系統内で本文異同が少ない」という写本間関係を示す。これらの写本間関係は、写本本文の定性的な調査により、それぞれの関係があると指摘されている。これらの写本間関係がある写本に対して、写本間距離を用いて定量的に調査し、尺度を設計している。このうち、明融臨模本と尊経閣文庫本「柏木」は「臨模されている」関係の基準値となっている。

具体的には、5-gram の場合、先行研究^{〔1〕}では、各関係にある写本群の分布を求め、その第三四分位(75%値)を簡易的な基準値としている。それぞれ「臨模されている」写本間距離は0.01、「字配が一致する」写本間距離は0.04、「伝来の過程で共通の本文を持つ」写本間距離は0.09、「同系統内で本文異同が少ない」写本間距離は0.19という値となっている。この値を元に調査対象写本の写本間距離を分類し、写本間関係を指摘する。

四 調査結果と考察

仮名字母の出現傾向の類似性と、本文表記の類似性、加えて、今後の研究のための基礎調査として本文表記の相違の発生要因を調査する。調査結果は図一と表一の「本文表記」として、本稿末に掲載している。

四、一 仮名字母の調査結果と考察

最初に、明融本と明融臨模本の各巻の仮名字母の出現傾向を、『源氏不審抄出』と共に分類した。明融本と明融臨模本の各巻の階層的クラスター分析の結果を図一に示す。図一の写本名には、巻名と写本名を記している。分類結果を示す図一では、同筆の可能性がある写本間距離 1.56 と、仮名字母の出現傾向が同一と見做せる写本間距離 0.66 を点線で示している。これらの点線以下で群を構成する写本は、仮名字母の出現傾向が類似することを示し、考察対象であることを示している。特に、写本間距離 1.56 以下で群を構成する巻の背景を灰色で示し、写本間距離 0.66 以下で群を構成する巻の直線の幅を太く示している。

図一の階層的クラスター分析の結果から、明融本の各巻は、主として、明融筆とされる写本群と、それ以外の群を構成しない他筆に分類された。明融臨模本の仮名字母の出現傾向は前稿^{〔2〕}で論じているので、ここではその概要を述べる。明融臨模本「桐壺」「花宴」の仮名字母の出現傾向は藤原定家のそれと同筆の可能性がある写本間距離で群を構成する。また、明融臨模本「柏木」「浮舟」はそれぞれ定家筆部と他筆部を持つ。それぞれ異なる群を構成することが明らかになっている。

明融筆とされる写本のうち「末摘花」「松風」「御法」が『源氏不審抄出』と、同筆の可能性がある基準値以下で同群を

構成した。「御法」は極札がなく、「幻」には「明融」との極札がある。これに関しては、「御法」の極札が剥がれ、「幻」に貼り付けられているとの指摘がある^{〔4〕}。分類結果も、「御法」は明融筆と同群に分類され、「幻」は明融筆には分類されていない結果となった。

明融ともう一人が書写した巻に関しては、「須磨」「明石」の冒頭一丁表から調査範囲は全て他筆によるため、他筆として扱っている。「玉鬘」は冒頭から四丁裏四行目まで、「紅梅」は冒頭から一丁裏四行目までが明融筆であり、それ以外は他筆との指摘がある。本調査では、調査対象範囲内の文字数が少ない明融筆部を除いた他筆部を対象に調査している。これらの他筆の巻は図一では明融筆に分類されていない。

この図一の分類結果は、「末摘花」「松風」「御法」が明融筆であるとの蓋然性を高めていると言える。しかし、それ以外の十六帖は、隣接しながらも別の一群に分類された。その詳細を確認すると、群を構成する写本と『源氏不審抄出』の写本間距離は一部の写本との距離が遠く、「末摘花」を含む群とは、同じ群を構成しないことが明らかになった。この結果の原因としては、書写年代の相違や親本の影響といったことが考えられるが、本調査方法を用いて、その詳細を明らかにすることはできない。また、明融筆である「関屋」「篝火」は、本文長が短いため分類できていない。これらの写本に関しては、異なる調査方法の開発と適用が必要であろう。

その他の写本に関しては、伝称筆者として「飛鳥井殿二楽卿御息曾衣」が挙がる「行幸」が「蜻蛉」と群を構成した。今回の調査対象写本の範囲では、これ以外に群を構成する写本は存在しなかった。また、比較対象とした、その他の『源氏物語』写本の中に、明融本と群を構成する写本を指摘することはできなかった。

四・二 本行表記の調査結果と考察

明融臨模本の各巻に関しては、多くの先行研究においてその本文が調査されている。ここでは、明融本と明融臨模本の本文表記の点から比較した調査結果を述べる。

表一の本文表記の列に、本文表記の相違を対象とした、提案する尺度に基づいた分類結果を示す。表二では、写本名を略称で示し、記号によって写本間関係を示している。以下に、本文表記の類似性の説明を行う。分類結果からは、明融臨模本「桐壺」と「花宴」が池田本に、「伝写過程で共通写本が存在する」写本間距離で類似する。この他に、明融臨模本に関しては、「帚木」が國學院大学本と飯島本と、「若菜上」が池田本と、「若菜下」が後柏原院本と、「柏木」が冷泉家時雨亭文庫本と後柏原院本、大島本と、「浮舟」が後柏原院本と、「同系統内で本文異同が少ない」写本間関係にあることが明らかになった。明融臨模本と本文が類似する後柏原院本「若菜下」「浮舟」の伝称筆者は、中御門宣胤である。中御門宣胤は後柏原院本「若菜上」も書写しているが、「同系統内で本文異同が少ない」写本間関係を示す距離よりは、わずかに遠く、分類できなかった。

明融本に関しては、明融本と書陵部蔵三条西家本の「宿木」が「同系統内で本文異同が少ない」写本間距離にあり、その本文表記が類似することが明らかになった。この他の明融本と本文表記が類似する巻は存在しなかった。この原因としては、明融筆写本の漢字出現率の高さに拠ると考えられる。明融筆写本は漢字表記が多く、本文に出現する文字の一割程度を占める。このため、比較した他の写本と本文表記が類似せず、写本間関係を指摘することができなかった。加えて、本稿では、前稿¹⁾の実践女子大学山岸文庫蔵耕雲本『源氏物語』と同様に、本文表記の詳細比較を行った。その事例として、「桐壺」と「浮舟」を取り上げた。明融臨模本「桐壺」は全文定家筆の親本を、明融臨模本「浮舟」は最初から九丁裏までが定家筆、それ以降が他筆と考えられる親本を、それぞれ臨模した本文を持つと考えられている。調

査の結果、本文表記の相違の発生要因は、漢字と仮名の使い分けや仮名遣いの割合が多いことが明らかになった。これは、本文表記の全相違に占める本文異同の割合は相対的に小さいことを示し、伝写関係を考察するためには本文表記が類似する写本を探索する必要があると考えられる。

四・二・一 明融臨模本「桐壺」

明融臨模本の調査対象範囲の本文文字数は6190文字ある。調査範囲にある明融臨模本と池田本「桐壺」の本文を直接比較し、その相違の発生箇所を確認した。本文表記の相違が発生している箇所は計80であった。明融臨模本と池田本の「桐壺」の写本間距離は0.06であった。本文文字数に占める本文表記の相違の発生率は1.3%である。この相違の内訳を表二にまとめた。

表二 「桐壺」の本文表記の相違の内訳

	池田本 1.3%	
表記の相違	頻度	割合
(1)漢字と仮名	21	26.3%
(2)本文異同	4	5.0%
(3)送り仮名	1	1.3%
(4)仮名遣い	35	43.8%
(5)音便	1	1.3%
(6)誤写と修正	2	2.5%
(7)脱落	16	20.0%
(8)その他	0	0.0%

明融臨模本と池田本の本文表記は「伝写過程で共通写本が存在する」写本間関係にあり、その相違は相対的に少ない。両写本の表記の相違の発生要因は、仮名遣いと、漢字と仮名の使い分け、脱落の順で発生していることが明らかになった。

四・二・二 明融臨模本「浮舟」

明融臨模本の調査対象範囲の本文文字数は5805文字ある。調査範囲にある明融臨模本と後柏原院本「浮舟」の本文を直接比較し、その相違の発生箇所を確認した。本文表記の相違が発生している箇所は計199であった。明融臨模本と後柏原院本の「浮舟」の写本間距離は0.17であった。本文文字数に占める本文表記の相違の発生率は3.4%である。この相違の内訳を表三にまとめた。

表三 「浮舟」の本文表記の相違の内訳

後柏原院本 3.4%		
表記の相違	頻度	割合
(1)漢字と仮名	118	58.1%
(2)本文異同	24	11.8%
(3)送り仮名	0	0.0%
(4)仮名遣い	41	20.2%
(5)音便	1	0.5%
(6)誤写と修正	13	6.4%
(7)脱落	4	2.0%
(8)その他	2	1.0%

明融臨模本と後柏原院本の本文表記は「同系統内で本文異同が少ない」写本間関係にある。両写本の表記の相違の発生要因は、漢字と仮名の使い分けと、仮名遣い、本文異同の順で発生していることが明らかになった。

五 まとめと今後の課題

本稿では、明融本と明融臨模本『源氏物語』を、室町時代書写の他の『源氏物語』写本と仮名字母と本文表記に関して比較し、その考察を行った。仮名字母の出現傾向の分類により、明融本は、明融筆『源氏不審抄出』と群を構成する三帖と、伝称筆者として明融を持つ十六帖に分類できることを示した。また、本文表記の類似性に基づいた分類により、明融臨模本のうち七帖に関して、関連する写本を指摘できることを示した。

これまで、稿者は、複数の『源氏物語』写本の本文異同ではなく、本文の用字に着目して本文を分類し、そこから写本間関係に関する新たな知見を得て、考察を行ってきた。しかし、今回調査対象とした明融本に関しては、本調査方法で関係を指摘できる写本が少なく、何らかの写本間関係を指摘することができなかった。この原因としては、明融本と近い時期に書写された比較対象となる写本の本文データを持つていないことや、明融筆の本文が漢字を多用し、他の『源氏物語』写本の本文と異なる表記を持つことが考えられる。今後は、明融本の様な本文表記が異なる写本の調査方法が必要であろう。新たな本文データの追加と用字の調査と並行して、何らかの本文の特徴に着目した調査方法の開発を検討していきたい。

謝辞

実践女子大学山岸文庫蔵明融本『源氏物語』を調査する機会を与えていただいた上野英子先生に末筆ながら厚く御礼申し上げます。また、本研究はJSPS科研費JP24K15658の支援により実施されました。

出典

- 調査対象写本は、出版または画像公開された『源氏物語』写本を対象としている。公開されているURIに所蔵者の記載のない写本は、国文学研究資料館電子資料館日本古典籍総合目録DBの画像データを用いている。
- ・明融本 実践女子大学山岸文庫蔵(1234貴重書庫室)
 - ・明融臨模本 東海大学桃園文庫影印刊行委員会編「源氏物語(明融本)Ⅰ,Ⅱ」東海大学出版会(1990)。
 - ・池田本 天理大学附属天理図書館(編)「新天理図書館善本叢書第3期 源氏物語」八木書店(2016-2018)。
 - ・飯島本 池田和臣編解説「飯島本源氏物語1-10」(2008-2009)。
 - ・國學院大学本 國學院大学図書館蔵 <https://opac.kokugakuin.ac.jp/digital/menus/index09.html>
 - ・冷泉家時雨亭文庫蔵「柏木」冷泉家時雨亭文庫(編集)冷泉家時雨亭叢書第九十九卷「源氏物語柏木 河海抄卷第十五 後陽成天皇源氏物語講釈開書」朝日新聞出版(2015)。
 - ・後柏原院本 陽明文庫デジタルアーカイブ <https://ymbk.sakura.ne.jp/ymbkda/genji.htm>
 - ・大島本 財団法人古代学協会・古代学研究所編 角田文衛・室伏信助監修「大島本源氏物語第一巻～第十巻」角川書店(1996)。
 - ・書陵部蔵三条西家本 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム
<https://shoryobukunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000629260000>

注及び参考文献

「1」仮名字母の出現傾向の調査方法に関しては、拙稿「仮名字母の出現傾向を用いた尾州家河内本源氏物語関連写本の調査」情報処理学会論文誌 Vol.61 No.2 p.144-151 (2020) 及び、拙稿「仮名字母の出現傾向を用いた池田本源氏物語の調査」じんも

んこん2020 論文集 p.121-128 (2020) . に報告している。本文表記の調査方法については、拙稿「本文表記の Ngram を用いた室町時代書写の源氏物語写本の分類」情報処理学会論文誌 Vol.63 No.2 p.347-354 (2022) . に報告している。仮名字母の出現傾向と本文表記の二つの調査方法を用いた写本調査に関しては、拙稿「後柏原院本『源氏物語』の仮名字母と本文表記―室町時代写本との比較を通して―」実践女子大学年報第42号 p.65-83 (2023) .、拙稿「実践女子大学山岸文庫蔵耕雲本『源氏物語』の用字―仮名字母と本文表記を中心として―」実践女子大学年報第43号 p.201-219 (2024) .、拙稿「正徹本『源氏物語』の用字の調査―仮名字母と本文表記を中心として―」じんもんこん2023 論文集 p.259-266 (2023) . に報告している。調査対象写本の増加に伴い、仮名字母の出現傾向と本文表記の二つの調査で用いた基準値を更新した報告として、拙稿「用字の類似性に基づいた写本間関係の探索―『源氏物語』写本の事例―」じんもんこん2024 論文集 p.225-232 (2024) . があ。本稿では、更新した基準値を用いて調査している。

- [2] 齊藤鉄也「定家監督書写四半本『源氏物語』の年代推定―仮名字母の出現傾向を用いて―」中古文学 112 巻 p.63-77 (2023) .
- [3] 齊藤鉄也「Ngram を用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け (3) ―書陵部蔵三条西家本・吉川史料館蔵青表紙本・日本大学蔵三条西家本・蓬左文庫蔵三条西家本との比較を通して―」実践女子大学文芸資料研究所年報第41号 p.77-128 (2022) .
- [4] 明融本及び明融臨模本に関しては、上野英子「山岸文庫蔵明融本源氏物語について」『中古文学』第42号 p.43-53 (1988) .、上野英子「山岸文庫蔵伝明融等筆源氏物語に関する書誌報告書Ⅰ―本文料紙と書写者の関係を中心に―」『源氏物語本文の研究』文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (A) 「源氏物語の研究支援体制の組織化と本文関係資料の再検討及び新提言のための共同研究」 國學院大學文学部日本文学科 (2011) や、上野英子「明融本源氏物語を通して覗く室町期寄合書きの一実態」中古文学会関西部会編『源氏物語 本文研究の可能性』和泉書院 (2020) に報告がある。その他に、本年度に開催された、実践女子大学文学部国文学科「実践女子大学所蔵 源氏物語・和歌コレクション展 ―文庫を開く―展示品解題(研究者向け解題)」(2024) <https://www.wjssen.ac.jp/learning/bungaku/kokubun/topics/20240709.html> がある。
- [5] 源氏不審抄出(宗祇著)ノートルダム清心女子大学古典叢書第三期六 福武書店(1982)ノートルダム清心女子大学附属図書館 <https://kokushonijl.ac.jp/biblio/100214107/>

実践女子大学山岸文庫蔵明融本『源氏物語』の用字

表一 調査対象とした明融本及び明融臨模本『源氏物語』写本の文字数

巻名	仮名数	字母数	漢字数	種類数	総字数	漢字率	本文表記	所蔵	伝写筆者	備考
01-桐寮	5638	90	552	87	6190	8.92%	池○	桃園文庫		明融臨模本
02-帯木	5871	86	319	42	6190	5.15%	園飯●	桃園文庫		明融臨模本
03-空蝉	4331	103	368	79	4699	7.83%		山岸文庫	明融	
04-夕顔	5105	99	594	120	5699	10.42%		山岸文庫	明融	
05-若紫	4943	97	617	139	5560	11.10%		山岸文庫	梶井殿	
06-末摘花	5354	106	483	88	5837	8.27%		山岸文庫	明融	
07-紅葉賀	5429	104	745	128	6174	12.07%		山岸文庫	明融	
08-花宴	4200	92	349	77	4549	7.67%	池○	桃園文庫		明融臨模本
09-葵	5576	104	705	101	6281	11.22%		山岸文庫	明融	
10-賢木	5149	108	884	162	6033	14.65%		山岸文庫	明融	
11-花散里	1567	88	100	35	1667	6.00%		桃園文庫		
12-須磨	5438	110	498	66	5936	8.39%		山岸文庫	他/明融	
13-明石	5562	106	541	124	6103	8.86%		山岸文庫	他/明融	
14-薄櫻	5347	117	758	131	6105	12.42%		山岸文庫		
15-蓬生	5760	102	631	115	6391	9.87%		山岸文庫	明融	
16-閑風	1719	89	221	78	1940	11.39%		山岸文庫	明融	
17-絵合*	5166	104	709	141	5875	12.07%		山岸文庫	明融	錯簡
18-松風	5171	108	517	107	5688	9.09%		山岸文庫	明融	
19-薄雲	5062	103	608	111	5670	10.72%		山岸文庫	明融	
20-朝顔	4913	101	596	110	5509	10.82%		山岸文庫	明融	
21-少女	5139	111	774	152	5913	13.09%		山岸文庫	飛鳥井殿	
22-玉鬘	4876	103	398	86	5274	7.55%		山岸文庫	明融/他	
23-初音	5600	112	586	110	6186	9.47%		山岸文庫	明融	
24-胡蝶										
25-蜚	5418	108	674	113	6092	11.06%		山岸文庫	明融	
26-菟夏	5869	120	456	77	6325	7.21%		山岸文庫	伏見殿邦高親王	
27-篝火	1217	86	132	46	1349	9.79%		山岸文庫	明融	
28-野分	6339	107	642	118	6981	9.20%		山岸文庫	正親町殿公叙卿	
29-行幸	8694	102	1402	199	10096	13.89%		山岸文庫	飛鳥井殿二葉御息曾良	
30-摩袴	5077	101	771	126	5848	13.18%		山岸文庫	明融	
31-真木柱	5937	101	710	83	6647	10.68%		山岸文庫	明融	
32-梅枝	5107	108	668	118	5775	11.57%		山岸文庫	明融	
33-摩裏葉	5127	117	576	94	5703	10.10%		山岸文庫		
34-若菜上	5941	88	404	51	6345	6.37%	池●	桃園文庫		明融臨模本
35-若菜下	5659	86	498	59	6157	8.09%	柏●	桃園文庫		明融臨模本
36-柏木	5201	92	370	48	5571	6.64%	大冷柏●	桃園文庫		明融臨模本
37-横笛	5151	110	567	87	5718	9.92%		山岸文庫		
38-鈴虫	5145	110	813	160	5958	13.65%		山岸文庫	明融	
39-夕霧	5069	102	470	84	5539	8.49%		山岸文庫		
40-御法	5167	106	723	134	5890	12.28%		山岸文庫	(明融?)	
41-幻	6020	115	637	106	6657	9.57%		山岸文庫	明融?	
42-勾宮	5316	111	770	119	6086	12.65%		山岸文庫		
43-紅梅	4659	108	739	111	5398	13.69%		山岸文庫	明融/他	
44-竹河	4939	104	796	132	5735	13.88%		山岸文庫	明融	
45-橘姫	4858	89	411	76	5269	7.80%		桃園文庫		明融臨模本
46-惟本	4991	108	755	152	5746	13.14%		山岸文庫		
47-総角	5055	111	586	92	5641	10.39%		山岸文庫	連歌師寿慶息	
48-早蕨	7107	93	685	118	7792	8.79%		山岸文庫		
49-宿木	5623	105	541	76	6164	8.78%	証●	山岸文庫	栄雅ノ娘	
50-東屋	5430	118	559	72	5989	9.33%		山岸文庫		
51-浮舟	5400	90	405	52	5805	6.98%	柏●	桃園文庫		明融臨模本
52-蜻蛉	5060	93	576	106	5636	10.22%		山岸文庫		
53-手習	5439	110	274	68	5713	4.80%		山岸文庫	連歌師宗養	
54-夢浮橋	5369	93	438	78	5807	7.54%		山岸文庫	大覚寺殿義俊	
源氏不審抄出	6289	103	1578	298	7867	20.06%			明融	

本文表記の相違の記号 ○：伝写過程で共通写本が存在する ●：同系統内で異同が少ない

図一 仮名字母の出現傾向に基づく明融本及び明融臨模本『源氏物語』写本の分類結果

